

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

##### ●金沢大学人間社会環境研究科人間文化専攻、人間社会環境学専攻

##### 「プロジェクト研究を通じた自立的研究者養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

院生の海外での調査研究を支援するため、中国及び韓国の協定校6校に海外リエゾンオフィスを設置し、またそれら協定校との合同で国際共同ゼミナールも実施した。しかしこれらは場所も回数も限られ、かつリエゾンオフィスの受け入れ担当者や共同ゼミナールの分担担当教員も特定の専門分野に限られたため、院生の幅広い専門分野や研究領域に見合った指導やアドバイスを提供するまでには至らず、その支援効果は限定的にとどまった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

海外リエゾンオフィス設置や国際共同ゼミナール実施はこれまでの研究教育交流実績をもとに相手方を選定したため、おのずとその専門領域に限りが出た。その結果、その専門領域に該当する分野を研究する院生には適切な指導が行えたが、そうでない院生にはあまり実施効果がなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本プログラムの主要部分である「プロジェクト研究」を通じた研究能力育成が、海外での調査研究だけを対象にしたものではなかったため、海外協定校との共同による指導が限定的にとどまった点はやむをえないものと判断する。ただし本プログラムがきっかけとなって協定校との協力分野が拡大していることも事実である。